

国立国語研究所学術情報リポジトリ

基礎篇第二課 さいふは どこにありますか：
「こそあど」 + 「_____がある」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002781

基礎篇
第二課

さいふは どこにありますか

—「こそあど」+「___ がある」—

国立国語研究所

前 書 き

国立国語研究所では、昭和49年度以来、日本語教育部ついで日本語教育センターにおいて、日本語教育教材開発事業の一環として日本語教育映画基礎篇を作成してきた。これは従来、文化庁において進められていた映画教材作成の事業を新たな形で引き継いだものである。

日本語教育映画基礎篇は、各課5分の映画にそれぞれ完結した主題と内容を持たせ、それを教育の必要に応じて使用する補助教材、また、系列的に初級段階の学習事項を順次指導する教材として提供しようとするものである。

映画の作成にあたっては、原案の作成・検討から概要書の執筆まで、また、実際の制作指導においても、日本語教育映画等企画協議会委員の方々に御協力頂いた。ここに厚く御礼申し上げる。

この解説書は、映画教材の作成意図を明らかにし、これを使用して学習し、指導する上での留意点について述べたものである。この解説書がこの映画教材の利用を一層効果あるものにするを願っている。この第二課「さいふはどこにありますか」の解説は、主として日本語教育センター日本語教育教材開発室日向茂男、同日本語教育研修室田中望の執筆によるものである。

昭和53年3月

国立国語研究所長

林 大

目 次

1. はじめに	1
2. この映画の目的・内容・構成	2
2.1 目的・内容	2
2.2 構成 — 場面を中心として	3
2.3 主要文型とその機能	13
2.4 音声について	26
3. この映画の効果的な利用のために	27
3.1 関連語	27
3.2 文型練習	31
4. 参考文献	40
資料 1. 使用語彙一覧	42
資料 2. シナリオ全文	55

1 はじめに

この日本語教育映画基礎篇は、初歩日本語学習期における視聴覚補助教材として企画・制作されたもので、この映画「さいふはどこにありますか」は、その第二課にあたるものである。

この映画の企画・構成・概要書の執筆などにあつたものは、次の通りである。

昭和49年度日本語教育映画等企画協議会委員（肩書きは当時のもの）

池尾スミ アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター専任講師

石田敏子 国際基督教大学専任助手

今田滋子 国際基督教大学助教授

川瀬生郎 東京外国語大学附属日本語学校助教授

木村宗男 早稲田大学語学教育研究所教授

斎藤修一 慶応義塾大学国際センター助教授

水谷 修 国立国語研究所日本語教育部日本語教育研究室長

日本語教育部（当時）関係者（肩書きは当時のもの）

林 大 日本語教育部長

武田 祈 日本語教育部日本語教育研修室長

この映画「さいふはどこにありますか」は、主として池尾スミ、今田滋子両委員の原案に検討を加えて作成したものである。

本解説書の執筆には、日本語教育センター日本語教育教材開発室の日向茂男、同日本語教育研修室の田中望があつた。

なお、この映画は、日本シネセル株式会社が制作を担当した。

現在、この映画は、より多くの人の利用の便をはかつて下記9か所において貸し出しを行っている。

- 北海道教育庁指導部社会教育課視聴覚教育係
- 宮城県教育庁社会教育課

- 都立日比谷図書館視聴覚係
- 愛知県教育センター企画管理課
- 京都府教育庁社会教育課
- 大阪府教育庁社会教育課
- 兵庫県教育庁社会教育・文化財課
- 広島県教育庁社会教育課
- 福岡県視聴覚ライブラリー

また、この映画は、上記制作会社が販売している。

2. この映画の目的・内容・構成

2.1. 目的・内容

この映画「さいふはどこにありますか」は基礎篇第一課「これはかえるです」に続く第二課として、作成されたものである。それゆえ、この作品も、第一課と同様に、学習者の側にはほとんど既習の語彙、文型を期待できない段階で使用されるはずのものである。しかしながら、実際には、映画を見ればわかるとおり、ここにはかなり難解な文型が盛り込まれている。すくなくとも既存の教科書類では、初級の教課程度の段階には出てこないような文型である。

これは、基礎篇三十課、しかも各巻5分という限られた範囲の中で、学習者にとって必要と考えられる学習項目を網羅しなければならないという構成上の理由によるところが大きい。しかし、むしろここでは、ここに取り上げられている程度の文型は、初歩の段階の必修項目として教えるべきであるという制作者の判断を重視すべきであろう。サブタイトルに「こそあど」+「―がある」とあるように、この映画の主要な学習項目は、

- (イ) 「こそあど」の体系の復習(第一課「これはかえるです」で導入された)
- (ロ) 事物の存在を表わす「―がある」の導入

である。しかし、映画制作上の主眼は(イ)(ロ)と密接に関係しながら、むしろ次の四つの項目におかれている。

- (ハ) 「は」と「が」の違いの導入

(⇒) 「__は__です」文型の拡張

(⇨) 「__は？」文型の導入

(↪) 「__です」文型の導入

なお、そのほかに

(ト) 人間及び動物の存在を表わす「__がいる」の導入(くわしくは、第四課で提示)

(ヲ) 会話を始めるためにしばしば用いられる語句の導入(このような語句はしばしば gambit 語句とよばれる。gambit とはチェスの第一手目のことである。日本語には適当な術語がないので、一応、会話始動語句としておく。)

(リ) 現前事物指示の「こそあど」から文脈指示の「こそあど」への拡張なども、この課で学習しうる項目としてあげられる。

これらの項目のうち(イ)(ロ)は基礎篇三十課の流れの中で、第二課として取り上げるのに適当であり、また、一般の教科書類でも、ほぼ共通にこの学習段階で、教えられているという理由で採用された。(ク)から(ケ)までは、一般の教科書類では必ずしも、この段階で取り上げるべきだという共通理解はないが、積極的に教育する方がよいという考えで採用した。それゆえ、これらの項目は、もしこの映画を利用される方が、この段階では適当でないと判断されるなら、進んだ段階への橋渡しの意味で利用されるのが望ましい。

項目(ト)は、後続の課へのつなぎの意味で採用された。

(ヲ)、(リ)は場面設定の上から、いわば付随的に採用された項目である。しかし(ヲ)は既存の教科書類の中で、あるいは実際のクラスワークの中でも、なかなか取り上げる機会がないが、重要な項目である。

企画の際には、項目(イ)(ロ)を軸にし、しかも(ク)～(ケ)を十分に生かすことができるような、言語場面の設定に留意した。また、第一課解説の2.1に述べられている(p.2～p.3)諸事項はこの課の企画にあたって充分、考慮されている。

2.2 構成 — 場面を中心として

2.2.1 映画での場面や言語表現については、以下の通り扱う。

1. 映画での構成に従って、場面を分ける時にはⅠ、Ⅱ、Ⅲ、……のように

し、それを更に小場面に分ける時には、I-1、I-2、I-3……のようにする。

2. 言語表現については、文単位で①②③……のように通し番号をつける。文を変形引用する時には、' の印をつけ、①' ②' ③' ……のようにする。変形引用が二つ以上ある時には、" " の順で ' を重ねていく。
3. 以下の解説では、あるまとまりを持った複数の文の集まり、いわゆる談話 (Discourse) を例としてあげることが多い。この談話には、〔 〕 付の番号を付けた。引用される文が談話ではない場合は〔 〕なしで () 付の番号をつけ、その変形引用には ' 印を付けた。引用される例の番号は、文、談話を問わず、出現順に通し番号にしてある。

文単位の認定については、多少問題のあるところもあるかもしれないがここでは積極的にその問題には触れない。①②③……の文番号は使用語彙一覧で引用される文やシナリオ全文でのものと共通である。

2.2.2. この映画は全体として、目的と内容のややことなる二つの部分から構成されている。一つは映画の前半の部分で、主に物がどこにあるか(あるいは人がどこにいるか)についての問答形式の部分である。ここでの目的は、学習者に事物(あるいは人)の存在を表わす言語形式を理解させることで、その内容は2.1.の項目(イ)、(ロ)、(ハ)、(ニ)が主たるものであり、ほかに、付随的に(ト)、(チ)、(リ)が含まれている。この部分は、付随的なものを除けば、初学者にとっても、さほど難しくなく部分であり、その意味で三十課の中の第二課で導入されるにふさわしいものである。

なお、この部分のはじめにストップモーションによる音声の繰返しがある。これは、学習者が音声を明確にとらえられるようにするためとともに、この繰返しの際に学習者自身が口に出して発音することができるように挿入されたものである。

他の一つは、映画の後半の部分で、ここでは、やはり事物の存在を表わす言語形式が中心になっているが、その目的としては、項目(ハ)、(チ)、(ク)が中心に据えられている。そのため、この部分は、前半の理解を前提として、より進んだ段階へ移るための橋渡しを意図していると見ることができる。

次に、この映画の流れにそって、順を追って各場面を整理してみることにしよう。

ろ。前半を場面Ⅰ、後半を場面Ⅱとする。

【 質問応答小場面集

この場面は、五つの小場面を並列的に寄せ集めたものである。それぞれの小場面に共通しているのは、人にたずね、そして答えが帰ってくる、という実際的な会話を基本としていることである。以下、五つの小場面を順に検討していくことにする。

【 -1 街角で

通行人(女)「①あのう、地下鉄の入口はどこにありますか。」

通行人(女)「②地下鉄の入口はどこにありますか。」

通行人(男)「③あ、この先の右側にあります。」

通行人(男)「④この先の右側にあります。」

通行人(女)「⑤ああ、どうもありがとうございました。」

この会話を始めている①は、日本人があるものについて、そのものの存在する場所をきく時の一般的な二つの方法のうちの一つを示したものである。(他の一つは【-2の⑦である。)

なお、このほかに、ものの存在する場所をきく文型として次のようなものがある。

(1)(1) この絵の中に指輪がかくされています。

(1)(2) さあ、よくみて下さい。この絵の中のどこに指輪がありますか。

この文型は①及び後出の⑦に比べて、かなり特殊な状況を必要とするように思われる。そこで、ここでは、①及び⑦を基本文型としてとってある。詳しくは後述。

①の「あのう」は2.1.の項目(ハ)の会話始動語句で、③の「あ」や⑤の「ああ」はいわゆる発見、了解を表わす感動詞。③の「この」は「こそあ」の基本体系を理解しているだけの初学者には被指示物が明確でないのですこし難しいかもしれない。この「こ」は相づちをうつ時に

(3) ああ、この先ですか。

ということから考えて、いわゆる「こ」対「こ」の対応の場合だと考えられる。

この対応については、第一課「これはかえるです」解説参照。

1-2 たばこやの前で

- 佐藤 「⑥ちょっとすみません。
⑦タクシー乗り場はどこですか。」
- 佐藤 「⑧タクシー乗り場はどこですか。」
- おばさん 「⑨あ、タクシー乗り場は……。」「⑩あそこにポストがありますね。」
- 佐藤 「⑪ええ。」
- おばさん 「⑫あのポストのむこうにあります。」
- おばさん 「⑬あのポストのむこうにあります。」
- 佐藤 「⑭ああ、あそこですね。」「⑮どうもありがとうございました。」

この会話は、もの存在する場所をきく時のもう一つの一般的な方法を示したものである。この「—はどこですか」の文型と「—はどこにありますか」の文型のちがいについては、2.3.であつかう。⑥は前出の会話始動語句のもう一つの例。⑩の文型は2.1.の項目①に關係して、ここに入れられたもので、これについても2.3で詳しく述べる。

⑪については、「はい」との違いに注意してほしい。一般に「ええ」に比べて「はい」の方が敬意が強いと考えられているようだが、ある種の人は、特に若い女性などが「はい」と答えるのは風情がない、「ええ」の方がよいと考えていること（芳賀綏 1962 『日本文法教室』東京堂出版 P.201参照）、また、出席をとる時やおつりを手渡す時のように「はい」といっても「ええ」とはいえない場合があることなどに注意。（詳しくは、北川千里 1977 「『はい』と『ええ』」日本語教育 33号などを参照のこと。）

⑫の「むこう」については、「あちら」と同じような意味になるもう一つの用法があることに注意。たとえば、東京の人間が、「きのうまで関西にいたんだけど、むこうは暑くてね。」と言う時など。（第九課「かまくらがあるきます」にもこの意味の「むこう」があるので、参照のこと。）

⑬の文型に關しては2.3.で述べる。⑮の「ありがとうございました」は、後出

の「ありがとう」との違いは待遇関係で説明できようが、「ありがとうございます」との違いは説明しにくい。次のような例を参考にしてほしい。後出⑩も参照。

(2)(4) それじゃ、私がやりましょうか。

(2)(5) どうもありがとうございます。

この場合は、「ありがとうございました。」はおかしい。

【一3 大学の正門前で

佐藤 「⑩あのう、事務室はどこにありますか。」

栄子 「⑪あの建物の中にあります。」

佐藤 「⑫あ、そうですか。」

⑬どうもありがとう。」

この【一3は、【一1の形式の復習である。たずねるものが「地下鉄の入口」から「事務室」へと変わっただけである。ただ⑩の「そうですか」はそれ全体で納得、了解の意を表わす表現で、この「か」はいわゆる疑問の終助詞の「か」とは違う取り扱いをしておく方が学習させやすい。これは、すでに第一課「これはかえるです」で学習した事項である。

こうした用法のはっきりした終助詞は、初期の段階からクラスワークの中で自然な形で忍びこませておくことができるものである。このような場面を設定した応答表現では、たずねる方が会話始動語句から話しを切り出し、相手の説明を納得、了解したという合図のうなずきの表現に終わる、というのは自然な表現形式であろう。もちろん、ものをたずねた場合にはそのあとにお礼の言葉がつく。

【一4 廊下で

佐藤 「⑭あの、事務室はどこですか。」

学生E 「⑮この廊下のつきあたりにエレベーターがあります。」

⑯その隣の部屋です。」

佐藤 「⑰そうですか。」

⑱どうも……………」

⑲のものをたずねる時の文型は前出の⑦と同じだが、それに対する答え方がここでは少し変っている。⑲は、

⑳ その隣の部屋にあります。

と同じ意味ではないであろう。映画の場面には事務室が出てこないのに、判断する材料がないが、常識的にいえば、この事務室は「その隣の部屋」の中の一部を占めているのではなく、その部屋そのものであろう。とすれば、この文型は、意味から言って、後出の、

㉑ (小林先生の研究室は) 図書館のそばの大学院の建物です。

とは違い、第一課で導入された、単純な「__は__です」の文型だといえよう。

㉒の「その」は第一課に出てくる「こそあ」(現前事物指示)ではなく、文脈指示の「こそあ」に属する。

1-5 喫煙室で

佐藤 「㉓すみませんが、田中さんどこにいますか。」

学生F 「㉔田中さんどこにいますか。」

学生G 「㉕小林先生の研究室にいますよ。」

佐藤 「㉖ああ、そうですか。」

佐藤 「㉗小林先生の研究室はどこですか。」

友子 「㉘図書館のそばの大学院の建物です。」

佐藤 「㉙どうもありがとうございました。」

友子 「㉚あの人はだれですか。」

この場面は、前半が人の存在する場所をきく方法、後半が物の存在する場所をきく方法を示している。「いる」と「ある」の違いについては、第4課「きりんはどこにいますか」で詳しく扱われるのでここではふれない。ただ、「ある」の場合と同様に㉕㉗も次のような表現が可能であることに注意しておいてほしい。

(3)㉖ 田中さんどこですか。

(3)㉗ 田中さんは小林先生の研究室です。

ちょうど、㉙㉚と平行する表現形式が可能なのである。

㉓の「すみませんが」は典型的な会話始動語句。ここで、これまでにでてきた会話始動語句を一応まとめておこう。

あのう(あの) (①、㉑から)

ちょっとすみません (⑥から)

すみませんが (㉔から)

このほかに、後出の

友子さん(㉓から)

も会話始動語句にはいる。このなかで、「あのう」、「(ちょっと)すみません(が)」は未知の初対面の人との間に会話を始める時の会話始動語句で、㉓の名前による呼びかけは親しい人との間に会話を始める時のもの。前者に属するものに、ほかに

ちょっとおたずねしたいんですが、

すみませんけど、

失礼ですが、

もしもし、

などがある。後者には「ちょっと」、「ねえ」など多くの感動詞、間投詞が入る。

接続助詞の「が」「けれども」などは、会話始動語句の中によく使われる。それは、これらの接続助詞が他の接続助詞とは違って、言語の二つの異なる機能を持つ表現すなわち、事態の論理関係を表わす機能を持つ表現と、個人間の関係を作りあげる機能(ここでいう会話始動語句や、質問応答という関係をつくる疑問の「か」、などはここに入る)を持つ表現をも結びつける力を持っているからである。

また、会話始動語句は話し言葉の領域のものであるが、書き言葉での類似の文型については、林四郎『文の姿勢の研究』(1973 明治図書)に詳細な論述がある。

㉔の「あの」は場面からははっきりしないが、もし、友子たちの視野から佐藤が消えた後の発話だとすると、文脈指示に近くなる。その場合は、

㉔ 今きた人、あの人はだれですか。

の意味である。

文脈指示の「こそあ」は、現前事物指示の「こそあ」の理解・学習が充分すんだあとの学習事項である。これについてはのちの課であつかわれるので、ここでは詳しくは述べないが、文脈指示の場合は、場面Ⅰ-4の㉔にみる「そ」が基本で、それにいくつかの条件が重なった時、「こ」あるいは「あ」が現われると考えてよいようである。「あ」が現われる場合の主要な条件は、㉔の場面からわかるように、「話し手、聞き手の双方が了解している」ということである。

Ⅱ 栄子と友子の部屋で

場面Ⅱは場面Ⅰと異なり、一つの長い談話の形をとっている。登場人物についても、仲のよい女子学生、栄子、友子の二人だけで、場面は二人の会話に終止する。

外出しようと寮の門まで来た栄子は、ふと、財布のことが気になり、ハンドバックの中を調べてみる。すると、財布がない。あわてて自分の部屋まで戻った栄子は同部屋の友子に手伝ってもらい部屋中さがすが、財布はどうしてもみつからない。

やっと最後になって、自分のコートのポケットの中に財布を入れたままであったことに気づく。

以上が場面Ⅱのあらましである。これを幾つかの小場面に分けて、順に見ていくことにしよう。

Ⅱ-1 財布があるかどうかきく

栄子 「③③友子さん、私の机の上に財布がありますか。」

友子 「③④財布？」

③③机の上にはありませんよ。」

この会話が始まる前に、栄子が寮の前で、ハンドバックの中をさぐって、財布をさがす場面があることに注意してほしい。栄子は、財布のことを考えながら③③を発話している。しかし、友子はそれを知らない。

Ⅱ-2 財布をさがして

栄子 「③⑥ありませんね」

友子 「③⑦本の下は？」

栄子 「③⑧本の下にはありません。

③⑧本の間にもありません。」

③⑦は、

③⑦' 本の下には？

としてもよい所であるが、ここでは故意に③⑦の形をとってある。これは、2.1.に述べたように、文型として認定したためであるが、これについては、2.3.で解説

する。㉞の「本の下には」は「—にも」も可能である。こういう所で「は」を使うか、「も」を使うかは、話し手の心理状態による。言語によってとりあげられる「事態」の方にはなにも相違はない。ここで問題になるのは、その「事態」を前の㉞と、結びつけてとらえるか(その場合は「も」)、独立のものとしてとらえるか(この場合「は」)、の違いである。ただし、独立のものとしてとらえている場合でも、㉞と全く関係がないのではない。むしろ、関係があることを故意にたち切ったのである。そのため㉞には、「考えてみるまでもない」あるいは「あるわけがない」といった強い調子が含まれる場合がある。いずれにせよ、「は」、「も」などについては、文一つだけを取り出したのではいけない。常に前の文との関係で、すなわち「談話」という単位で考えていかなければならない。

Ⅱ-3 財布をさがして

友子 「㉟じゃあ、ひき出しの中は？」

栄子 「㊱ひき出しの中にもありませんね。」

友子 「㊲ラジオの前の箱の中にもありませんね。」

栄子 「㊳机の下にもありません。」

友子 「㊴ラジオの後ろにもありませんね。」

この部分については、前述の該当箇所を参照してほしい。ただ㉟の「じゃあ」は、㉞、㊱のような「—は？」の文型といっしょに出てくることが多いことに注意。

このあたりは、映画を見ればすぐわかるように、非常に不自然な会話が耳につく。たとえば、㊲などは日常生活のこうした場面では決して現われないような文である。ラジオの後ろにも同じような箱があつて、それと区別する必要があるならともかく普通であれば、

㊲' この箱の中にもありませんね。

ですむ。また、どうしても「ラジオの前の」を言う必要があるなら、

㊲" ラジオの前の箱ね、この中にもありません。

質問の形なら、

㊲" ラジオの前に箱があるでしょう。その中は？

とでも言うであろう。

ところで、㉔が不自然なのはなぜだろうか。少なくとも、㉔が文法的に誤りだから、という人はいないだろう。たしかに、これは文法的に正しい。にもかかわらず、話しことばでは普通は、現われないような文である。

この文の不自然さと㉔、㉔のような文の機能については、のちに触れる機会があろう。ただ、ここで頭に入れておいてほしいのは、文法的に正しいからといって、すべての文を使うことができるわけではない、ということである。

Ⅱ-4 財布をさがして

友子 「㉕机の横のくずかごの中は？」

栄子 「㉖くずかごですか？」

友子 「㉗この中にはありません。」

㉕については、㉔について述べたことがそのままあてはまる。㉖の形は、2.1.の項目(つ)つまり「—です」の文型である。これに関しては2.3.で述べる。

ただ、ここではこの部分の会話全体に、前に㉓について論じたことがあてはまることに注意してほしい。くずかごの中などにあるはずがない、という感じ方が㉖の形となって現われているのである。

Ⅱ-5 財布が見つかる

友子 「㉘この辺にはありませんね。」

栄子 「㉙ええ、机のまわりにはありませんね。」

栄子 「㉚ああつ。」

栄子 「㉛あそこです。」

友子 「㉜えっ、どこ？」

栄子 「㉝ここですよ。」

㉞このポケットの中ですよ。

㉟ほら。」

㉕、㉖、㉗の「です」は、㉓のように「—にあります」の意味に解釈すべきではない。㉘と同じものである。この点に関しても2.3.を参照のこと。㉙は、㉑の「ええ」の所で少し触れた「はい」の問題と関係がある。「ほら、おみやげだよ」などの例を考えてほしい。

以上、場面Ⅱは「財布」と「どこに」と「存在する」「存在しない」をめぐって展開した。場面Ⅰの学習を土台にしているのでそこに多少難しい文型も導入されていた。この場面を中心にした解説で十分論じ切れなかった問題を次に文型中心に論じてみる。

2.3. 主要文型とその機能

2.2で述べたように、この課の内容項目は下記の6つである。

- (1) 「こそあど」の体系の復習
- (2) 事物の存在を表わす「—があります」文型の導入
- (3) 「は」と「が」の違いの導入
- (4) 「—は—です」文型の拡張
- (5) 「—は？」文型の導入
- (6) 「—です」文型の導入

このうち、(1)については、第一課に詳しい解説があるので、参照されたい。むしろこの課に出てくる「こそあど」系の表現で問題になるのは、

㉔ その隣の部屋です。

などの、文脈指示の「こそあど」であるが、ここでは文例として現われたものの学習にとどめ、詳しい学習は後に残す。

2.3.1 「—があります」文型について

この文型の意味の理解自体は、学習者にとってそれほど困難とは思われない。ただし、(4)との関連で、次の点には注意しておいてほしい。

日本語では、存在を表わす表現、たとえば「机の上に本があります」と事物の間の関係を表示する表現、たとえば「この本は私のです」に、ちがう言語形式、すなわち、「あります」と「です」を使う。ところが、英語などの言語では、「There is a book on the desk」と「This book is mine」のように、同じ言語形式（be 動詞）を使う。そのため、英語を母国語とする学習者はこの二つの表現の意味のちがいについて、混乱を起すことがある。

特にこの課でのように、「は—です」の文型が拡張されて、存在を表わす表現と同じ意味になる場合、たとえば、

㉘ 小林先生の研究室はどこですか。

㉙ 小林先生の研究室はどこにありますか。

のような場合、学習者は、その機能のちがいをつかみとることがいっそう、むずかしくなってくる。

そのため、実際のクラスの中では、㉘の文型と、㉙の文型を同時に導入することは避けた方がよいだろう。㉙の文型を十分に練習し、完全に定着した後に㉘を導入すべきである。(あるいは、むしろ、「は」の機能が完全につかめるならば、㉙の文型を後廻しにすることも可能である。)

2.3.2 「は」と「が」の違いについて

この課の中では、「AはBにあります」と「BにAがあります」の二つの存在を表わす表現が使われている。この二つの表現は、それが表わしている事態、すなわち、AとBとの論理的关系について言えば、まったく同じである。しかし、われわれ日本人は、それをちゃんと使いわけている。

日本語教育の中で、「は」と「が」の使いわけの指導は、もともとむずかしいものの一つであるといわれる。このむずかしさは、その使い分けが、主に話し手の主観、すなわち同じ事態をどのようにとりあげるかという心理に依存しているという点にある。しかし、まったく、主観の問題だ、と言ってしまってもできない。

ここでは、なるべく客観性を保ちうる説明をしていくことにする。そして、それで、説明がつかなくなった時に、はじめて主観的な説明をしていくことにする。そして、それで、説明がつかなくなった時に、はじめて主観的な説明をすることにしてしよう。

「は」と「が」の違いについては、最近しばしば、「古い情報」と「新しい情報」という概念で説明されている。(なお、これについては、詳しくは、久野暉『日本文法研究』(1973 大修館)などを参照のこと。ただし、同書では、「が」が新しい情報に関係していると述べているが、「は」と古い情報の関係については明言していない。)

たとえば、よく例にひかれる、

(4)(6) 昔々、おじいさんとおばあさんがありました。

(4)(7) おじいさんは山へ柴かりに行きました。

では、(6)の「おじいさんとおばあさん」は聞き手にとって、新しい、文脈から予測することのできない、未知の情報であり、(7)の「おじいさん」は古い、既に文脈によって与えられている((6)で)、既定の情報である。また、(6)では「山へ柴かりに行きました」の方が新しい情報である。

(5)(8) だれが酒を買いに行く？

(5)(9) 私が行きます。

ここでは、「私」は新しい、文脈からは予測できない情報であり、「行きます」は文脈によって与えられている、古い情報である。

この説明によって、また、疑問詞が「は」ではなく「が」をともなうことも理解できる。

(10) だれかがここにいた。

この場合の「だれか」が文脈によって与えられていることはありえない。もし与えられているのなら、その者の名前なり、何なりをあげればよいので、「だれか」という必然性はなくなってしまう。

ところで、(5)(9)の文では、「私」だけが新しい情報で、「行きます」は古い情報だったが、文全体が新しい情報である場合もある。

(11) あつ、あそこに林さんがいる。

この文では、「林さん」が新しい情報で、他は古い情報であるわけではなく、全体が新しい情報なのである。一般に談話の最初に出てくる「が」を含む文はこの形の新しい情報であることが多い。そこで、本来なら、(4)(6)も、また、(談話の最初にある場合の)(10)も文全体が新しい情報であるというべきであった。

また、「が」以外の助詞も新しい情報をにすることができる。

(6)(12) 何時に家に着きますか。

(6)(13) 八時に着きます。

この場合、「八時」は新しい情報である。

しかし、「は」と「が」に話をしよれば、以上見てきたように一般に、いわゆる提題化された「は」は古い情報、「が」は新しい情報を表わすということができよう。

しかしながら、これだけでは説明しきれない例もある。たとえば、次の例を考

えてみよう。

(7)(14) AさんとBさんが来ることになっているんだけど、ちょっと見てくれない。

(7)(15) うん、いいよ。

(7)(16) あっ、Bさんが来る。

この(7)(16)は新しい情報だろうか、古い情報だろうか。(7)(14)で「AさんとBさんが来る」という表現があるから、(7)(16)は文脈によって与えられている、よって、古い情報である、という考え方もありうる。しかし、これには、反論が可能である。すなわち、「AさんとBさんが来ることになっている」ということと、実際に「Bさんが来る」ということとは全く別の事態を表わしている、だから(7)(16)は聞き手にとって、新しい情報と考えられる。あるいは、(7)の談話は基本的に次のような談話と同じである。

(8)(17) AさんとBさんのどちらが(先に)来ますか。

(8)(18) Bさんがきます。

この場合には、(8)(18)のBさんは(8)(17)の中ですでに言及されているからといってそれが、文脈から予測できる情報であることにはならない。もし、予測出来る情報であったら、(8)(17)の質問は意味をなさない。それゆえ、(8)(18)の「Bさん」は新しい情報である。

では、次のような場合はどうだろうか。対話者二人は、Aという人がたずねてくるので、その準備をしているとしよう。そして、その対話者の一人が、窓からAさんが来るのをみつけて、

(19) あっ、Aさんが来た。

といったとする。

この場合は、(7)と同じように考えるわけにはいかない。聞き手の頭の中にあるのは、「Aさんが来ることになっている」ということであり、それは、「Aさんが来た」とは違う事態をあらわしているという反論もここではきかない。というのは、それは実は、「来ることになっている」と「来た」の違いでしかないからである。「Aさん」が新しい情報であるかどうかは、それとは関係がない。

ところで(19)は

(19) あっ、来ましたよ。

でもかまわない。しかし、省略できるからといって、それがいつも古い情報であるわけではない。たとえば、ある人がハンカチを落したのを見て、

(20) ハンカチが落ちましたよ。

と言わずに

(20') 落ちましたよ。

と言ったとしても、「ハンカチ」は古い情報だということにはならない。これが省略できるのは、ハンカチを指し示すなり、なんなりの非言語的状況がかわりをしているからである。(20)を言われた人が、前もってハンカチについて考えていたからではない。(19)が(20)と同様に省略できるのも、たしかに状況がささえているからである。しかし、その状況は(20')の場合と違う。ここでは、聞き手が窓からAさんの来るのを見ているわけではない。ここでの状況とはすなわち、聞き手と話し手が、Aさんのことについて話し合っていたということである。すなわち、ここで、省略されても聞き手にわかるのは、文脈によってすでに与えられた古い情報であるからにはかならない。(19')の「来ましたよ」は聞き手にとって新しい情報かもしれない。しかし、「Aさん」は新しい情報とはいえない。

これまで述べてきた「新しい情報」、「古い情報」という概念は、本質的に聞き手の側に属する概念であることに注意してほしい。このことは、(5)(9)の「私」が新しい情報であるということからすぐ理解される。発話者が自分自分についての判断を述べる時に、その「自分」が発話者にとって「新しい情報」であるということとはあり得ない。また、ある人が電話で、Bという人が来るという連絡をうけて、それを他の人に伝える時、

(21) Bさんが来ますよ。

と言ったとしよう。その場合、「Bさん」が話し手にとって「新しい情報」とはいえないであろう。

そもそも、「情報」という概念自体、聞き手側に属する概念なのである。

ところで、こうした聞き手側に属する概念をになっている言語表現を使用できるということは、話し手が聞き手の知識量を推測できるということ、いいかえれば、相手の立場に自分を投射する能力があるということの意味している。この点の認識は、「は」と「が」の違いを考える上で、また、それを教える上で、非常に重要である。

さて、聞き手側に属する「新しい情報」と「古い情報」という概念だけでは、「は」と「が」の違いを説明するのに不十分であることは、これまでの考察から理解されたであろう。そこで、今度は話し手の側に属する概念、すなわち、「前提のある表現」と「前提のない表現」という概念を導入して説明を試みることにしよう。

これまで述べてきたことは、「は」に関していえば、その提題の機能に関係したことがらであった。「は」にはもう一つ、いわゆる「対比」の機能がある。たとえば、(7)の談話で、(7)(6)のかわりに、

(7)(6)' Bさんは来たよ。

と答えたとする、その場合には「Aさんはまだだけど」、あるいは「Aさんの事は知らないけれど」という意味合いが含まれてくる。また、

(22) 彼はなしは食べる。

といえは、「みかんはたべない」、「リンゴはたべない」等々、あるいは、「みかんやリンゴやその他の果物は知らないが」という意味合いが含まれている。一般にこうした対比の「は」の場合には、「は」が付いている名詞類に関して、ある「集合」が形成される。(7)(6)' の場合には、それは「AさんとBさん」という集合である。この集合は、(7)(6)' の場合のように言語化された、(7)(4)で明確なものであることもあれば、(10)の場合のように明確化されていないこともある。後者の場合には、それは状況によって決定される。たとえば、

(23) 彼はたばこはすう。

に関して形成される集合は、{たばこ、葉巻、パイプ……}であるかもしれない、{たばこをすう、酒を飲む、賭事をする……}の集合であることもある。(この場合は(23)は、「たばこをすうことはする」と解釈されている。)この集合のどちらが採用されるかは状況によって決定される。

一方、(7)(6)'、(22)についても触れたように、「は」以下の部分についてもある集合が形成される。たとえば、(7)(6)' には{きたよ、まだだよ、どうだかわからない} (22)には{たべる、たべない、どうだかわからない}が形成される。このように、この場合の集合は、肯定形に対する否定形、否定形に対する肯定形という形をとりやすいが、それだけではない。内容上、なんらかの意味で対比的でありさえすれば、集合の要素になりうる。

そこで、一般に「は」を含む文には二種類の集合が形成されることになる。

{
⋮
机の上
机の横
机の中
}

机の下には本があります。

{
えんぴつがあります。
ノートがあります。
万年筆があります。
⋮
}

こうした集合は、ある表現をする時に、暗黙のうちに合意されているものであり、いわば、その表現の「前提」になっているものである。そこで、この集合を頭において行われる表現を「前提のある表現」とよぶ。一般に「は」を含む表現は「前提のある表現」である。

それでは、「が」についてはどうだろうか。

次の例を考えてみよう。

(9)(24) この服はいかがですか。

(9)(25) これはねえ、悪くないんだけど……………。

(9)(26) では、これはいかがですか。

(9)(27) うん、これがいい。

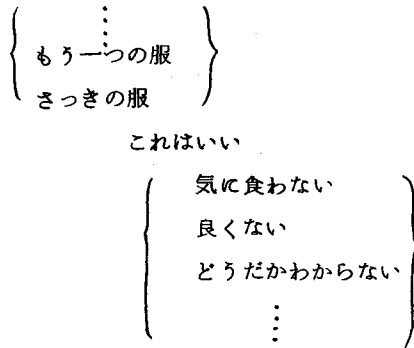
この場合の(9)(27)の「これ」も聞き手にとって明らかに古い情報である。しかし談話の流れからわかるように、(9)(27)は相手を考えに入れた表現ではない。それゆえにここでは、聞き手側に属する概念である「古い情報」、「新しい情報」の区別はきいてこない。ここで問題になるのは、(9)(26)の「これ」は、(9)(24)の「この服」及び他の候補にあがる服と対比的に、すなわち、そうした服の集合を前提にして、表現されているのに、(9)(27)の「これ」はその集合を無視して表現されている点である。(9)(27)では、他の服など問題にならないのである。同じことが(9)の例についても成立する。「が」を含む表現は「前提のある表現」である「は」に対して、「前提のない表現」なのである。

ここで注意しておいてほしいのは、「新しい情報」、「古い情報」という概念

は聞き手の側に関する概念があるために、ある種の客観性を持つが、「前提のない表現」、「前提のある表現」という概念は、純粹に話し手の心理に対応するものであり、その意味で客観性を持たないということである。(927)をもう一度、考えてみよう。ここでは、先へのべたように「前提のない表現」がとられている。しかし、まったく同じ状況で、「前提のある表現」すなわち、

(927) うん、これはいい。

も同様に可能なのである。この二つの表現のどちらをとるかは、話し手の心理が



といった集合を前提としてとらえるか、そうしないかにかかってくる。それゆえどちらの表現をとるかを客観的に、状況の方から決定する手がかりはないのである。

以上で、「は」と「が」の違いのだいたいのところを述べ終ったわけではあるが、これで「は」、「が」に関する全てのことを説明できるわけではない。(たとえば、これだけでは、

(28) 海がきれいだ。

(28') 海はきれいだ。

のちがいを説明するのは苦しいであろう。この二つの文は、まったく同じ状況で使われうる。たとえば、ある人が、山道を歩いていて、突然、眼前に開けた海を見てこれを言ったとしよう。この場合、(28) に対して、{山、空、森……}や{きたない、さびしい、どうだかわからない……}の集合を前提としていると考えるのは、おかしいようである。海がきれいだろうか、きたないだろうか、とか、山道や周りの森はきれいではなかったが、とか考えていなければ(28') が出てこないだろうか。もし、前提というのが、そういった、直前の思考のようなものでな

く、その人のこれまでの全経験を含むものだというのなら、それは、(28)にも言えることである。)

しかし、とにかくこの映画の主要な内容項目を説明するための概念の道具だてはそろったことになる。以下、映画に現われる順を追ってその内容項目を説明していくことにしよう。

③ 地下鉄の入口はどこにありますか。

⑤ この先の右側にあります。

話し手が初対面の聞き手に向って、

③の「地下鉄の入口」を古い情報としているのを疑問に思われるかもしれない。しかし、これは考えてみれば、あたりまえのことである。もし、話し手が聞き手に「地下鉄の入口が ___ にある」ということを前提できないとしたら、すなわち、聞き手が地下鉄の位置などまったく知らないと考えたなら、話し手は、その人を聞き手に選んだりはしなかったろう。相手がそれについて知っていると考えればこそ、聞き手に選ぶわけである。その意味で、「地下鉄の入口」が「は」付きの聞き手にとって古い情報であるのは当然である。

一般に質問の場合は古い情報を使う方が普通であるらしい。というのは、質問をする時に相手に何の知識も前提しないということは普通考えられないからである。(1)の談話をもう一度、考えてみよう。

(1)(1) この絵の中に指輪がかくされています。

(1)(2) さあ、よく見て下さい。どこに指輪がありますか。

この場合は、一種のクイズのような状況の設定がある。そのため(1)(2)に、「きっと、あなたがたにはわからないでしょう」という含みを感じられる。ということは、話し手は聞き手に「___ に指輪がある」との知識さえ前提していないのである。われわれは日本語教育のクラスで、この種の質問をしぼしぼしてしまうことがある。ある意味では、それはしかたのないことかもしれない。しかし、日常生活では(1)のような特殊な状況がない限り、この種の質問型は出てこないように思われる。この映画の中で、「が」を含む質問型が、ひとつしか出てこないのはこのような判断によるものである。

ただし、

㉓ 私の机の上に財布がありますか。

も、多少、人工的な匂いのする文である。日常の生活場面で、われわれはこういう質問をするだろうか。この状況で一番自然なのは、たぶん、

㉓' 財布が見あたらないんだけど、私の机の上にはありませんか。

というように、まず、何が問題になっているのかを提示することだろう。もし、そうしないとしたら、

㉓" 私の机の上に財布ありませんか。

という形になるだろう。（「財布」のあとに助詞がないことに注意）

㉓" の文型が出てくるには、積極的な理由があるようである。まず、この場合は、㉓のように、「は」を使った形

㉓" 財布は私の机の上にありますか。

にするわけにはいかない。㉓の場合とちがって（私の）財布は、「地下鉄の入口」のように、公共性のある、だれでも知りうるようなものではない。それゆえ、古い情報として、前提できるようなものではない。といって、聞き手に、前もって何の情報も与えないでいて、新しい情報としてその真偽を判断させるのは、あまりに唐突である。㉓" の文型は、その両方をさける意味で、存在する価値があるのだろう。㉓については、場面Ⅱ-3の㉔について述べたことがあてはまる。㉓はたしかに文法的に正しい文である。しかし、われわれ日本人が会話で普通に使う文ではないだろう。日本語教育においては、その初歩の段階で、文法のシステムを理解させるという理由で、㉓のような文型がおしえられる。この映画でこの文型をとったのも、その理由による。しかし、少なくとも、進んだ段階では、㉓'、㉓" の文型を積極的に日本語の文型として教えるべきであろう。特に㉓" の文型は、㉓の文型の省略型ではない。独立した表現上の価値を持っているのである。

⑧ タクシー乗り場はどこですか。

⑨ タクシー乗り場は……………。

⑩ あそこにポストがありますね。

⑫ あのポストのむこうにあります。

⑧は2.3.3.で扱うことにして、先に⑩からはじめよう。⑩が新しい情報である

ことは明らかである。ここで問題にしたいのは、なぜ、

⑨' タクシー乗り場はあそこのポストのむこうにあります。

と言わないで、こういうかである。もう一度、④②、③③の例を考えてみよう。

④② ラジオの前の箱の中にもありませんね。

④②' ラジオの前の箱ね、この中にもないわ。

③③ 私の机の上に財布がありますか。

③③' 財布が見あたらないんだけど、私の机の上にはありませんか。

こうして、ならべてみると、⑨、⑩、⑫は、ちようと、④②'、③③'に、⑨'は④②、③③に相当する表現であることがわかる。一般に、言語の使用上のルールとして、一つの単文の中に一定量以上の新しい情報を連続して入れてはならないというルールがあるようである。おそらく、⑨、⑩、⑫や④④'、③③'などの文型は、このルールに抵触しないようにするために、存在するのであろう。

2.3.3 「— は — です」文型の拡張について

②⑩ 事務室はどこですか。

②② その隣の部屋です。

②⑨ 小林先生の研究室はどこですか。

③⑩ 図書館のそばの大学院の建物です。

前節(2.3.2.)のおわりに述べたルールは、質問応答の場合に特に厳格に適用されるようだ。そのため通常、「古い情報+新しい情報」という形であらわされる文の「新しい情報」の部分が最小限におさえられることがある。これは情報としての価値の上から言っても当然のことで、余分なものが少なければ少ないほど情報としての価値は高いのである。

日本語ではそのための表現として「— は — です」の文型がある。⑧の「タクシー乗り場はどこですか。」の質問形や、②⑩と②②、②⑨と③⑩の質問応答はこの形式をとっている。

日本語では、広い範囲にわたってこの「一つの古い情報+一つの新しい情報」という文型をとることができるようである。その場合の条件は、状況によって他の情報が余分なものになっていることとその情報が名詞的なもので表わされることである。よく例にひかれる、

(29) 私はうなぎです。

(30) 太郎は二階で勉強です。

なども、その例である。

なお、「__は__にあります、います」という形の所在を表わす文は他の文に比べて、「__は__です」の形をとりやすい。これはおそらく、所在をあらわす「ある」、「いる」が他の動詞とちがって、普通の「__は__です」の文と同様に関係表示的であることによるのであろう。また、「__は__にあります、います」の文型と「__は__です」の文型との使い分けについては、ほかに、待遇関係的な要素もあるようであるが、それについてはここでは触れない。

234. 「__は？」と「__です」について

③⑤ 机の上にはありませんよ。

③⑦ 本の下は？

③⑤は前に述べた「前提のある表現」である。

すなわち、次のような形をとる。

{ 本の間
 ⋮
 本の下 }

机の上にはありませんよ。

{ あります。
 ⋮
 どうだかわからない。 }

この前提されている集合のうち、文の上にあげた集合をA、下にあげた集合をBとしよう。とすると、Aの中の要素は一般に単独でたまにはBの要素と結びついて、質問型を作る。

たとえば、

③⑦' 本の下には？

③⑦" 本の下にはありますか。

③⑦''' 本の間は？

③⑦'''' 本の間はどうですか。

ここで、「には」が出てくるが、「は」が出てくるかは、後ろにつく表現との間

の文法的関係による。

日本語の談話の中には、こうした形のものがしばしば現れる。

⑩⑧① 彼はなしはたべません。

⑩⑧② ジャ、りんごは？

⑩⑧③ りんごもたべません。

⑩⑧④ ジャ、いちじくは？

⑩⑧⑤ いちじくはたべます。

この形は、「は」の基本的機能(対比の機能)に応じて出てくるものである。日本語教育においては、⑩⑧②、③のような形は省略形であるとして、積極的に教えられないことがあまりないようである。しかし、この形が、表現としてかなり高い価値を持っていることは、明らかである。とすれば、少なくとも、進んだ段階であるいは、むしろ、第一課から、基本文型として、導入されるべきものであろう。

④⑤ 机の横のくずかごの中は？

④⑥ くずかごですか？

④⑦ あそこです。

④⑧ ここですよ。

④⑨ このポケットの中ですよ。

前に「__は__です」の形についての所で、情報としての価値の高さに触れたがもつとも価値の高いのは、新しい情報一つだけを含む文である。④⑦、④⑧、④⑨もその意味で、情報としての価値を高めるために使われている文である。もし、この古い情報の部分を付け加えるとすれば、

④⑩ (私たちがさがしている)財布があるのはあそこです。

となるだろう。しかし、この古い情報の部分は、状況により、聞き手にとって自明なことなので、表現される必要はない。むしろ、情報価値の上からは、あつてはならないものである。④⑩と同じ文型を持つものに、

④⑪ 地震だ！

④⑫ おや、雨だ。

などがある。

話し手が発する文の中には、聞き手にとって、よくわからなかつた部分、あるいは、納得のいかない部分が含まれていることがある。その場合、それは再び新

しい情報として聞きかえされたり、念押しされたりする。㊸はその例である。

この形はまた、感嘆を表わす場合にも使われる。

㊸(38) 私の兄は医者です。

㊸(39) あ、お医者さんですか。

この場合、次の例のように、助詞がつく場合があることに注意してほしい。

㊸(40) これは私の姉の子供です。

㊸(41) え、あなたのお姉さんのですか。

㊸(42) きのう、子供と海へ行きました。

㊸(43) ほう、お子さんとですか。

また、次のような例もある。

㊸(44) 私の母は医者です。

㊸(45) え、お母さんがですか？

なお、「—です」文型には、ほかに次のような重要な用法がある。

(46) きのう、おっしゃったことですが、私もひと晩、考えてみました。

(47) 例の書類だけど、きみのところにある？

ちょうど、少し前のところで、㊸、㊸などについて述べたルールの適用によって、作り出される文と同じ形のものである。これらはみな、一種の提題化の機能を持っている。

この形もまた、日常、ひんぱんに使われるものでありながら、日本語教育の中では無視されることの多いものである。

以上、述べたことによつて「—です」の文型が、単なる「—は—です」の文型の省略形ではないということが理解されると思う。日本語教育においては「—は？」の文型と同様、これまでは、省略形であるとして、軽視される傾向があった。しかし、この文型が、表現として独自の価値を持っている以上、今後は、はっきりそれを文型として認め、早い段階から導入していくべきだと言えよう。

2.4. 音声について

これまで、文型の機能の問題を中心にあつかつてきたために、音声面についてはほとんど触れなかつた。そこで、ここでまとめて、簡単な注意だけ述べておくことにしよう。

2.2、2.3.では映画の中の音声を主にひらがなに移して表記してきた。もちろん中には、文字表記として適切でないものもあるかもしれない。たとえば、⑤、⑨、⑭、⑱、⑳などの「あ」は「ああ」と書くか、「あつ」と書くかまよところである。

イントネーションについては、㉔などの「—ですか」の形を注意してほしい。また、「は」についてだが、対比の機能をあらわすために、強調が使われることがある点にも注意しなければならない。たとえば、

(46) この人は学生です。

は、普通、単独では対比的には使わないが、「この人」に協調を置くことによって特に対比の機能を持たせることができる。

3 この映画の効果的な利用のために

2.では、主にこの映画の各場面とそこで使われている文型についてみてきた。ここでは、まず場所、位置を表わす語彙を関連語彙として取上げ、次に2.で考察した文型の機能をどのようにして教えるかを考えてみよう。

なお、教材として、この映画を実際のクラスワークの中でいかに効果的に利用するか、という点に関しては、第一課「これはかえるです」の解説書を参照してほしい。

3.1. 関連語彙

この課の中で、語彙として問題になるのは場所、位置を表わす語彙であろう。場所、位置を表わす語彙は、この映画の中に、かなりの数がとりあげられているが、そのほかに次のようなものがある。分類及び排列は、国立国語研究所 1964 『分類語彙表』 秀英社版 に従った。なお、この課の中で出てくるものには、※印を付してある。

空間・場所

※こ こ

ここいら

そ こ

そこいら

※ど こ

ところどころ

あちこち

方々(ほうぼう)

各 地

範囲

～中(じゅう)

地 方

方向

～の方(ほう)

こちら

こっち

そちら

そっち

あちら

あっち

どちら

どっち

向かい

真正面

※そ ば

方面・方角

手 前

※向こう

向こう側

東

西

南

北
東 側
西 側
南 側
北 側
東 部
西 部
南 部
北 部

左右

左
右
左 側
※右 側
左 手
右 手

上下

※上
下
真 上
真 下
地 下
屋 上

中・頂・すみ

※中

まん中
中ほど
町なか
都 心
頂 上

てっぺん

～のはずれ

隅

かど

面・側・表裏

正面

両側

片側

表

裏

裏手

前後・間・端

※前

※後ろ

駅前

目の前

店先

※間

はし

内外

※中(なか)

外

内側

外側

室内

都内

市内

国内

国外

底・隣

底

※突当り

横

真 横

隣

よ そ

ふち・そば・まわり・沿い

付 近

※そ ば

窓 際

近 所

遠 く

近 く

※まわり

あたり

※辺(へん)

どのへん

～沿い

※先

並 び

以上の語彙はすべて、「— にあります」という文型の中に入りうるものである。中には、進んだ段階で導入すべきものも多数あるが、参考のためにあげておいた。

3.2 文型練習

2で述べたことからわかるように、「は」と「が」の違い、「—は？」の導入などに関しては、一般の日本語教育で考えられているような、文レベルでの文型のとらえ方では不十分である。たとえば、次の文の「は」が、

{
 ⋮
 机の中
 机の下
}

(48) 机の上には本があります。

{ ノートがあります。
新聞があります。
⋮
}

という形の集合を前提とすることを教えるためには、「机の上には本があります」の形だけを、教えこんだのでは、何にもならない。あるいは、「机の上」の部分に他のことばを代入し、「本」の部分に他のことばを代入して、代入練習をしたとしても、それだけでは、この場合の「は」の機能を教えたことにはならない。そのためには、どうしても、

(49) 机の中にノートがあります。

(50) 机の上には本があります。

(51) 机の下には新聞があります。

のように、一連の談話として与えなければならぬ。ちょうど、(48)を単独で発話する時に、われわれが頭の中で、前提していることを、言語化してやるわけである。クラスワークの際にも、学生一人一人に、(48)の文、あるいはそれに、他の単語を代入した文を言わせてみただけではいけない。必ず一人の学生に(5)の形の談話を一連のものとして、発話させるようにしなければならない。

そこで、ここでは、いわゆる文型の概念を拡張して、「談話型」とでもよぶべきものを中心に考え、それをもとに練習を作っていくことにしよう。

なお、ここでは一つの文の構造に関する練習はとりあげなかったが、3.1.の関連語彙を使って、簡単にできるはずである。以下の練習では、学習者に個々の文を構成する力があることを前提している。以下の練習を行う前に、それを確かめるための練習は当然行われるべきである。

練習問題はすべてかな（ひらかな、かたかな）書きにした。

3.2.1 「は」と「が」の違いに関する練習

まず、「が」から「は」に変換する形の練習を考えよう。これは、「が」で新しい情報として与えられたものが、提題化されて古い情報となる場合である。もちろん、この形の練習はほかにも、パターンが考えられる。ここにあげるのは一つの例にすぎない。他のパターンについては、各自いろいろ工夫してほしい。

- 例1. つくえのうえにほんがあります。
2. このほんはあなたのほんですか。
 3. いいえ、わたしのほんではありません。
 4. では、あなたのほんはどこにありますか。
 5. わたしのほんはつくえのなかにあります。

ここで、(2)の「は」は提題の「は」、(4)の「は」は、対比の「は」である。

応答練習 A (1)ポケットのなかにかぎがあります。

(2) _____ じむしょの _____ か。

(3) _____ 、じむしょの _____ 。

(4)では、じむしょの _____ 。

(5)むねのポケットに _____ 。

B (1)つくえのうえにほんがあります。

(2)そのほんはえいごの _____ 。

(3) _____ 、えいごの _____ 。

(4)では、えいごの _____ 。

(5) えいごの _____ つくえのしたに _____ 。

C (1)ここにタバコがあります。

(2)そのタバコはアメリカのタバコ _____ 。

(3) _____ 、アメリカの _____ 。

(4)では、アメリカの _____ 。

(5) _____ あそこに _____ 。

D (1)あそこにくるまがありますね。

(2) _____ くるまはあなたの _____ 。

(3) _____ 、わたしの _____ 。

(4)では、あなたのくるまは _____ 。

(5) _____ ちゅうしゃじょうに _____ 。

E (1)そこにしんぶんがありますね。

(2)それ _____ ゆうかんですか。

(3) _____ 、ゆうかん _____ 。

(4)では、ゆうかん _____ 。

(5) _____ テレビのした _____。

今度は、「は」を伴う文の中に、新しい情報としての「が」をともなる文が挿入される形の練習である。これは、映画の中のパターンをそのまま使うことができる。ここでは「は _____ です」の形を使って練習を作っている。それによって「は」で提題化される文は「_____ は _____ です」の形をとりうるが、「_____ に _____ があります」の新しい情報の文はそうならないことに注意させよう。

例2 (1)すみませんが、タクシーのりばはどこですか。

(2)タクシーのりばは……。あそこにポストがありますね。あのポストのむこうです。

応答練習 F (1)トイレはどこですか。

(2)トイレは……。あそこにじむしつが _____。あのむかい _____。

G (1)こうどうはどこですか。

(2)こうどうは……。このたてもののとなりになりたいいくかん _____。あの _____ 裏 _____。

H (1)こうしゅうでんわはどこですか。

(2)こうしゅうでんわは……。そこにしょくどう _____。その _____ なかに _____。

I (1)あなたのいえはどこですか。

(2)わたしのいえは……。ほらあそこに、とうきょうタワー _____。あのました _____。

J (1)(ちずをみながら)あなたのかいしゃはどこですか。

(2)わたしのかいしゃは……。ここにかっこう _____。この _____ すぐちかく _____。

3.2.2 対比の「は」に関する練習

「_____ は？」の形を練習する前に一般的な形から始めよう。

例1. (1)つくえのうえにほんがあります。

(2)つくえのしたにはノートがあります。

練習A (1)みぎのポケットにさいふがあります。

- (2)ひだりのポケット _____ハンカチ_____。
- B (1)たなのうえにテレビがあります。
 (2) _____した _____テープレコーダー_____。
- C (1)みぎのひきだしにスプーンがあります。
 (2)ひだりのひきだし _____フオーク_____。
- D (1)うえのたなにじしよがあります。
 (2)したのたな _____ざつし_____。
- E (1)このはこのなかにせんえんさつがあります。
 (2)あのはこのなか _____いちまんえんさつ_____。

次に、「____には、____には」の形になる場合の練習を行う。これは、ちょうど、

Aさんの家にもBさんの家にもクーラーがあります。

の、「も」の用法の逆のケースである。

例2 (1)つくえのうえにはんがあります。

(2)つくえのしたにはノートがあります。

→(3)つくえのうえにはほん、したにはノートがあります。

練習F (1)私のつくえにタイプライターがあります。

(2)あのひとのつくえにはでんわがあります。

→(3) _____。

G (1)うえのへやにクーラーがあります。

(2)したのへやにはテレビがあります。

→(3) _____。

H (1)あのたてもものてまえには、こうだんじゅうたくがあります。

(2)あのたてもものむこうには、こうえんがあります。

→(3) _____。

I (1)アメリカのきたにカナダがあります。

(2)アメリカのみなみにはメキシコがあります。

→(3) _____。

J (1)じむしつのみぎてにトイレがあります。

(2)じむしつのひだりてにはきょうしつがあります。

→(3) _____。

これらの練習がすんだ後に、「__ には？」の形の練習に移ろう。

例3. (1)つくえのうえにはんがあります。

(2)ノートもありますか。

(3)つくえのうえにはありません。

(4)じゃ、つくえのしたには？

(5)ええ、つくえのしたにはあります。

この場合の「つくえのうえには」には、他の所にはあるという含みがある。すなわち「他の所にある」ということが前提になっているのである。

練習K (1)ポケットのなかにさいふがあります。

(2)かぎも _____ 。

(3)ポケットのなか _____ 。

(4)じゃ、ハンドバックのなか _____ ？

(5)ええ、_____ 。

L (1)えきのまえにきつさてんがあります。

(2)レストランも _____ 。

(3)えきのまえ _____ 。

(4)じゃ、えきのうら _____ ？

(5)ええ、えきのうら _____ 。

例4. (1)つくえのうえにわたしのノートありませんか。

(2)つくえのうえにはありません。

(3)じゃ、つくえのしたには？

(4)つくえのしたにもありません。

(5)じゃ、いすのうえには？

(6)いすのうえにもありません。

(7)じゃ、ほんだなには？

(8)ほんだなにもありません。

練習M (1)そのへんにえんぴつけづりありませんか。

(2)このへんにはありませんよ。

(3)じゃ、ひきだしのなか _____ ？

(4)ひきだしのなか _____ 。

(5)じゃ、とだなのなか _____ ?

(6)とだなのなか _____ 。

(7)じゃ、カバンのなか _____ ?

(8)カバンのなか _____ 。

N (1)あなたのへやにタイプライターありませんか。

(2)わたしのへや _____ 。

(3)じゃ、おうせつま _____ ?

(4)おうせつま _____ 。

(5)じゃ、しょさい _____ ?

(6)しょさい _____ 。

次に「___は？」の練習に移る。この場合に注意すべきことは、「___は？」に対する答えが「___にもありません」になって「に」が出てくることである。

例5. (1)つくえのうえにライターありませんか。

(2)つくえのうえにはありません。

(3)じゃ、テーブルのうえは？

(4)テーブルのうえにもありませんよ。

(5)じゃ、つくえのうえは？

(6)つくえのうえにはあります。

練習O (1)アメリカにパチンコやありますか。

(2)アメリカ _____ 。

(3)じゃ、フランス _____ ?

(4)フランス _____ 。

(5)じゃ、かんこく _____ ?

(6)かんこく _____ あります。

P (1)このみせにきつてありますか。

(2)ここ _____ 。

(3)じゃ、あのやつきよく _____ ?

(4)やつきよく _____ 。

(5)じゃ、タバコや _____ ?

(6)タバコや _____ ありますよ。

Q (1)このビルのしたにレストランありませんか。

(2)このビル _____。

(3)じゃ、となりのビル _____?

(4)となりのビル _____。

(5)じゃ、むかいのデパート _____?

(6)あ、むかいのデパート _____

R (1)おとなりにクーラーある?

(2)おとなり _____。

(3)じゃ、やまださんのうち _____?

(4)やまださんのうち _____?

(5)じゃ、いしいさんのうち _____?

(6)いしいさんのうち _____ あるよ。

3.2.3. 「—です」に関する練習

感嘆を表わす場合

例 1. (1)わたしのうちにはブランデーがありますよ。

→(2)ほう、ブランデーですか。

練習 A (1)わたしがっこうにはビデオコーダーがありますよ。

(2)えっ、_____。

(1)このへやにはコンピューターがあります。

→(2)へえ、_____。

(1)わたしのあにはいしゃです。

→(2)ほう、おいしゃさん _____。

(1)あのひとのおくさんはブラジル人です。

→(2)え、_____。

(1)あのたてものはだいがくこうどうです。

→(2)へえ、_____。

疑問、念押しの場合

例 2. (1)コーヒーカップはれいぞうこのなかにあります。

→(2) れいぞうこですか？（ほんとですか）

例 3. (1) 子どものへやにステレオがあります。

→(2) おこさんのへやにですか？

→(2) ステレオですか？

F (1) いいさんのうちにコンピューターがあります。

→(2) _____

→(2) ^Y _____

G (1) トイレはいえのそとにあります。

→(2) _____

H (1) いえのそばにデパートがあります。

→(2) _____

→(2) ^Y _____

I (1) はいざらはテーブルのしたにあります。

→(2) _____

→(2) ^Y _____

J (1) このビルのむかいにしょうぼうしょがあります。

→(2) _____

→(2) ^Y _____

感嘆を表わす場合と疑問念押しの場合でのイントネーションのちがいはつきりさせるように注意してほしい。

ここでは、第一課、第二課に出てきた文型のみを使って、練習を作ったが、もちろん、この形はほかのいろいろな文型を使って作ることもできる。その場合、助詞がつくつかないかによく注意してほしい。なお、このほかに、練習としては次のようなものも考えられる。例のみを示す。

例 4. (1) しんぶんはわたしのつくえにあります。

→(2) えっ、どこですか。

→(2) つくえのうえですか、したですか。

最後に、「_____です」を提題として使った形の練習をしてみよう。

例 2. (1) わたしのじしょですが、ほんだなのなかにはありませんか。

練習 K (おかあさんのくつ、げたばこのなか)

- _____。
- L (かいしゃのしょるい、テーブルのうえ)
- _____。
- M (わたしのまんねんひつ、あなたのへや)
- _____。
- N (アパートのかぎ、そのあたり)
- _____。
- O (はやさんのくるまのキイ、そのへん)
- _____。

以上、この課の主要項目に関する練習の作例をあげた。これらは、決してこの課のみに限定されるものではない。これ以降の課でも、こうした練習は充分できるし、いつも心がけていて、行わなければならない。むしろ、のちの課になるほど、練習がつくりやすいであろう。その上、この課の主要項目は、決してやさしいものではない。説明したとしても簡単にのみこませることができるようなものではない。繰返し、繰返し練習を与えて、体で覚えさせる以外に手はないのではなかろうか。

4. 参考文献

- I 存在文についての一般的な文法上の問題については、次の文献を参照のこと
 三上 章 1972 「存在文の問題」『象は鼻が長い』(第5版) くろしお出版
 佐伯哲夫 1976 「存在文について」『語順と文法』 関西大学出版
 久野 暉 1973 『日本文法研究』 大修館書店
- II 「は」と「が」の違いについては、最近の論考として、次のものをあげることができる。
 久野 暉 1973 『日本文法研究』 大修館書店
 川本茂雄 1976 『ことばとところ』 岩波書店

黒田成幸 1976 「日本語の論理・思考」『日本語講座Ⅰ 日本語と国語学』 岩波書店

阪田雪子 1975 「『は』と『が』はどう違う」『新日本語講座1 文法の見えてくる本』 汐文社

Ⅲ 「—は—です」の形の文についての文法的説明は次の文献にある。

奥津敬一郎 1975 「私ほうなぎです」『新日本語講座2 文法の見えてくる本』 汐文社

Ⅳ この解説書中に言及した文献を最後にあげておく。

芳賀 綏 1962 『日本文法教室』 東京堂出版

北川千里 1977 『はい』と『ええ』『日本語教育』33号

林 四郎 1973 『文の姿勢の研究』 明治図書

国立国語研究所 1964 『国立国語研究所資料集6 分類語彙表』 秀英出版

資料1 使用語彙一覧

これは映画中に使用された全ての語と使用文例を一覧表にしたものである。資料2のシナリオ全文のせりふ同様、教材として活用できることも考慮してかな(ひらかな、かたかな)書きにしてある。

1. 見出し語はアイウエオ順に配列し、そこにその使用文例を全て書き出した
2. 見出し語の認定については、初級日本語教育の立場に立っている。
 - 2-1 「あります」「ありません」を見出し語にして「ます」「ません(ませ・ん)」ここでは取り上げていない。
 - 2-2 「には」「にも」は「に」と別に見出し語にしている。
 - 2-3 「ございました」を見出し語にしている。
3. 見出し語の語義、活用変化、他の語との結びつきなどに基づいて下位分類する場合には、(1)(2)……のようにした。
 - 3-1 「です」は、「です」「ですか」「ですね」「ですよ」により下位分類してある。
 - 3-2 「あります」「ありません」も終助詞との結びつき方で下位分類してある。
 - 3-3 「か」は疑問の「か」とうなづき、承了的意味合いの強い「か」の違いにより下位分類してある。
4. 使用文例は、文例の文頭の①②……の順に提出した。(1)(2)……と下位分類した場合も、その分類内で同一の提出順をとっている。全くの同一文の場合には、②⑤のように数字を横に並べ、引用を一回ですました。ただし、同一文でも文中において語の用いられる位置が異なれば、引用を繰返した。

なお、文頭の①②……の数字は、シナリオに現われた文の通し番号で、この解説書全体に共通のものである。
5. 見出し語の横には〔 〕で当用漢字の範囲内で漢字を示し、また、その横には()で語の使用回数を示した。
6. 文例の使用環境を知りたい場合には、資料2のシナリオ全文を参照のこと。

あ(3)

- ③ あ、このさきのみぎがわにあります。
- ⑨ あ、タクシーのりばは…………。
- ⑱ あ、そうですか。

ああ(3)

- ⑤ ああ、どうもありがとうございました。
- ⑭ ああ、あそこですね。
- ⑳ ああ、そうですか。

ああっ(1)

- ⑤⑩ ああっ。

あいだ〔間〕(1)

- ③⑨ ほんのあいだにもありません。

あそこ(3)

- ⑩ あそこにポストがありますね。
- ⑭ ああ、あそこですね。
- ⑤⑪ あそこです。

あの(4)

- ⑫⑬ あのポストのむこうにあります。
- ⑰ あのたてもののなかにあります。
- ⑳ あのひとはだれですか。

あの(1)

- ⑳ あの、じむしつはどこですか。

あのう(2)

- ① あのう、ちかてつのいりぐちはどこにありますか。
- ⑱ あのう、じむしつはどこにありますか。

ありがとう(4)

- ⑤ ああ、どうもありがとうございました。
- ⑮⑳ どうもありがとうございました。
- ⑲ どうもありがとう。

あります(11)

- (1)③ あ、このさきのみぎがわにあります。
④ このさきのみぎがわにあります。
⑫⑬ あのポストのむこうにあります。
⑰ あのたてもののなかにあります。
⑳ このろうかのつきあたりにエレベーターがあります。
(2)① あのう、ちかてつのいりぐちはどこにありますか。
② ちかてつのいりぐちはどこにありますか。
⑯ あのう、じむしつはどこにありますか。
⑳ ともこさん、わたしのつくえのうえにさいふがありますか。
(3)⑩ あそこにポストがありますね。

ありません(11)

- (1)③⑧ ほんのしたにはありません。
③⑨ ほんのあいだにもありません。
④⑤ つくえのしたにもありません。
⑦ このなかにはありません。
(2)③⑥ ありませんね。
④① ひきだしのなかにもありませんね。
④② ラジオのまえのはこのなかにもありませんね。
④④ ラジオのうしろにもありませんね。
④⑧ このへんにはありませんね。
④⑨ ええ、つくえのまわりにはありませんね。
(3)③⑤ つくえのうえにはありませんよ。

います(3)

- (1)②⑤ すみませんが、たなかさんはどこにいますか。
②⑥ たなかさんはどこにいますか。
(2)②⑦ こばやしせんせいのけんきゅうしつにいますよ。

いりぐち〔入口〕(2)

- ① あのう、ちかてつのいりぐちはどこにありますか。
② ちかてつのいりぐちはどこにありますか。

うえ〔上〕(2)

- ③⑨ ともごさん、わたしのつくえのうえにさいふがありますか。
- ③⑨ つくえのうえにはありませんよ。

うしろ〔後ろ〕(1)

- ④④ ラジオのうしろにもありませんね。

ええ(2)

- ①① ええ。
- ④⑨ ええ、つくえのまわりにはありませんね。

えっ(1)

- ⑤② えっ、どこ？

エレベーター(1)

- ②① このろうかのつきあたりにエレベーターがあります。

か(15)

- (1)①① あのう、ちかてつのいりぐちはどこにありますか。
- ②② ちかてつのいりぐちはどこにありますか。
- ⑦⑧ タクシーのりばはどこですか。
- ①⑥ あのう、じむしつはどこにありますか。
- ②⑩ あの、じむしつはどこですか。
- ②⑤ すみませんが、たなかさんどこにいますか。
- ②⑥ たなかさんどこにいますか。
- ②⑨ こばやしせんせいのけんきゅうしつはどこですか。
- ③② あのひとはだれですか。
- ③③ ともごさん、わたしのつくえのうえにさいふがありますか。
- ④⑤ くずかごですか。
- (2)①⑧ あ、そうですか。
- ②③ そうですか。
- ②⑧ ああ、そうですか。

が(4)

- (1)①⑩ あそこにポストがありますね。
- ②① このろうかのつきあたりにエレベーターがあります。

- ③③ ともこさん、わたしのつくえのうえにさいふがありますか。
(2)②⑤ すみませんが、たなかさんはどこにいますか。

くずかご(2)

- ④⑤ つくえのよこのくずかごのなかは？
④⑥ くずかごですか。

けんきゅうしつ〔研究室〕(2)

- ②⑦ こばやしせんせいのけんきゅうしつにいますよ。
②⑧ こばやしせんせいのけんきゅうしつはどこですか。

ここ(1)

- ⑤⑨ ここですよ。

ございました(3)

- ⑤ ああ、どうもありがとうございます。
①⑤③① どうもありがとうございます。

この(6)

- ③ あ、このさきのみぎがわにあります。
④ このさきのみぎがわにあります。
②① このろうかのつきあたりにエレベーターがあります。
④⑦ このなかにはありませんね。
④⑧ このへんにはありませんね。
⑤④ このポケットのなかですよ。

こばやし〔小林〕(2)

- ②⑦ こばやしせんせいのけんきゅうしつにいますよ。
②⑧ こばやしせんせいのけんきゅうしつはどこですか。

さいふ(2)

- ③③ ともこさん、わたしのつくえのうえにさいふがありますか。
③④ さいふ？

さき〔先〕(2)

- ③ あ、このさきのみぎがわにあります。
④ このさきのみぎがわにあります。

さん(3)

- ㉔ すみませんが、たなかさんはどこにいますか。
- ㉕ たなかさんはどこにいますか。
- ㉖ とも子さん、わたしのつくえのうえにさいふがありますか。

した〔下〕(3)

- ㉗ ほんのしたは？
- ㉘ ほんのしたにはありません。
- ㉙ つくえのしたにもありません。

じむしつ〔事務室〕(2)

- ㉚ あのう、じむしつはどこにありますか。
- ㉛ あの、じむしつはどこですか。

じゃあ(1)

- ㉜ じゃあ、ひきだしのなか？

すみません(2)

- ㉝ ちょっとすみません。
- ㉞ すみませんが、たなかさんはどこにいますか。

せんせい〔先生〕(2)

- ㉟ こぼやしせんせいのけんきゅうしつにいますよ。
- ㊱ こぼやしせんせいのけんきゅうしつはどこですか。

そう(3)

- ㊲ あ、そうですか。
- ㊳ そうですか。
- ㊴ ああ、そうですか。

その(1)

- ㊵ そのとなりのへやです。

そば(1)

- ㊶ としょかんのそばのだいがくいんのたてものです。

だいがくいん〔大学院〕(1)

- ㊷ としょかんのそばのだいがくいんのたてものです。

タクシー(3)

⑦⑧ タクシーのりばはどこですか。

⑨ あ、タクシーのりばは……………。

たてもの〔建物〕(2)

⑩ あのたてもののなかにあります。

⑪ としょかんのそばのだいがくいんのたてものです。

たなか〔田中〕(2)

⑫ すみませんが、たなかさんはどこにいますか。

⑬ たなかさんはどこにいますか。

だれ(1)

⑭ あのひとはだれですか。

ちかてつ〔地下鉄〕(2)

⑮ あのう、ちかてつのいりぐちはどこにありますか。

⑯ ちかてつのいりぐちはどこにありますか。

ちょっと(1)

⑰ ちょっとすみません。

つきあたり〔突当り〕(1)

⑱ このろうかのつきあたりにエレベーターがあります。

つくえ〔机〕(5)

⑳ とも子さん、わたしのつくえのうえにさいふがありますか。

㉑ つくえのうえにはありませんよ。

㉒ つくえのしたにもありませんよ。

㉓ つくえのよこのくずかごのなかは？

㉔ ええ、つくえのまわりにはありませんね。

です(15)

(1)⑳ そのとなりのへやです。

㉕ としょかんのそばのだいがくいんのたてものです。

㉖ あそこです。

(2)⑦⑧ タクシーのりばはどこですか。

⑳ あの、じむしつはどこですか。

- ②⑨ こばやしせんせいのけんきゅうしつはどこですか。
- ③② あのひとはだれですか。
- ④⑥ くずかごですか。
- (3)⑱ あ、そうですか。
- ②③ そうですか。
- ②⑧ ああ、そうですか。
- (4)⑭ ああ、あそこですね。
- (5)⑵⑲ ここですよ。
- ⑤④ このポケットのなかですよ。

どうも(5)

- ⑤ ああ、どうもありがとうございます。
- ⑱⑳ どうもありがとうございます。
- ⑱⑨ どうもありがとう。
- ⑲④ どうも……………。

どこ(10)

- ① あのう、ちかてつのいりぐちはどこにありますか。
- ② ちかてつのいりぐちはどこにありますか。
- ⑦⑧ タクシーのりばはどこですか。
- ⑱⑥ あのう、じむしつはどこにありますか。
- ⑲⑩ あの、じむしつはどこですか。
- ⑲⑵ すみませんが、たなかさんはどこにいますか。
- ⑲⑥ たなかさんはどこにいますか。
- ⑲⑵ こばやしせんせいのけんきゅうしつはどこですか。
- ⑵⑲ えっ、どこ？

としょかん〔図書館〕(1)

- ⑳⑩ としょかんのそばのだいがくいんのたてものです。

ともこ〔友子〕(1)

- ⑳③ ともこさん、わたしのつくえのうえにさいふがありますか。

なか〔中〕(7)

- ⑱⑦ あのたてもののなかにあります。

- ④⑩ じゃあ、ひきだしのなかは？
- ④⑪ ひきだしのなかにもありませんね。
- ④⑫ ラジオのまえのはこのなかにもありませんね。
- ④⑬ つくえのよこのくずかごのなかは？
- ④⑭ このなかにはありません。
- ④⑮ このポケットのなかですよ。

に(14)

- ① あのう、ちかてつのいりぐちはどこにありますか。
- ② ちかてつのいりぐちはどこにありますか。
- ③ あ、このさきのみぎがわにあります。
- ④ このさきのみぎがわにあります。
- ⑩ あそこにポストがありますね。
- ⑫⑬ あのポストのむこうにあります。
- ⑯ あのう、じむしつはどこにありますか。
- ⑰ あのたてもものなかにあります。
- ⑲ このろうかのつきあたりにエレベーターがあります。
- ⑳ すみませんが、たなかさんはどこにいますか。
- ㉑ たなかさんはどこにいますか。
- ㉒ こばやしせんせいのけんきゅうしつにいますよ。
- ㉓ ともこさん、わたしのつくえのうえにさいふがありますか。

には(5)

- ⑳ つくえのうえにはありませんよ。
- ㉑ ほんのしたにはありません。
- ④⑭ このなかにはありません。
- ④⑮ このへんにはありませんね。
- ④⑯ ええ、つくえのまわりにはありませんね。

にも(5)

- ③⑨ ほんのあいだにもありません。
- ④⑪ ひきだしのなかにもありませんね。
- ④⑫ ラジオのまえのはこのなかにもありませんね。

- ④③ つくえのしたにもありません。
- ④④ ラジオのうしろにもありませんね。

ね(8)

- ⑩ あそこにポストがありますね。
- ⑭ ああ、あそこですね。
- ③⑥ ありませんね。
- ④① ひきだしのなかにもありませんね。
- ④② ラジオのまえのはこのなかにもありませんね。
- ④④ ラジオのうしろにもありませんね。
- ④⑧ このへんにはありませんね。
- ④⑨ ええ、つくえのまわりにはありませんね。

の(32)

- ① あのう、ちかてつのいりぐちはどこにありますか。
- ② ちかてつのいりぐちはどこにありますか。
- ③ あ、このさきのみぎがわにあります。
- ④ このさきのみぎがわにあります。
- ⑫⑬ あのポストのむこうにあります。
- ⑰ あのたてものなかにあります。
- ⑲① このろうかのつきあたりにエレベーターがあります。
- ⑲② そのとなりのへやです。
- ⑲⑦ こばやしせんせいのけんきゅうしつにいますよ。
- ⑲⑨ こばやしせんせいのけんきゅうしつはどこですか。
- ⑳⑩ としょかんのそばのだいがくいんのたてものです。
- ⑳⑩ としょかんのそばのだいがくいんのたてものです。
- ⑳⑩ としょかんのそばのだいがくいんのたてものです。
- ⑳③ ともごさん、わたしのつくえのうえにさいふがありますか。
- ⑳③ ともごさん、わたしのつくえのうえにさいふがありますか。
- ⑳⑤ つくえのうえにはありませんよ。
- ⑳⑦ ほんのしたは？
- ⑳⑧ ほんのしたにはありません。

- ③⑨ ほんのあいだにもありません。
- ④⑩ じゃあ、ひきだしのなかは？
- ④⑪ ひきだしのなかにもありませんね。
- ④⑫ ラジオのまえのはこのなかにもありませんね。
- ④⑬ ラジオのまえのはこのなかにもありませんね。
- ④⑭ ラジオのまえのはこのなかにもありませんね。
- ④⑮ つくえのしたにもありませんね。
- ④⑯ ラジオのうしろにもありませんね。
- ④⑰ つくえのよこのくずかごのなかは？
- ④⑱ つくえのよこのくずかごのなかは？
- ④⑲ つくえのよこのくずかごのなかは？
- ④⑳ ええ、つくえのまわりにはありませんね。
- ⑤① このポケットのなかですよ。

のりば〔乗り場〕(3)

- ⑦⑧ タクシーのりばはどこですか。
- ⑨ あ、タクシーのりばは……………。

は(14)

- ① あのう、ちかてつのいりぐちはどこにありますか。
- ② ちかてつのいりぐちはどこにありますか。
- ⑦⑧ タクシーのりばはどこですか。
- ⑨ あ、タクシーのりばは……………。
- ⑬⑭ あのう、じむしつはどこにありますか。
- ⑮⑯ あの、じむしつはどこですか。
- ⑲⑳ すみませんが、たなかさんはどこにいますか。
- ㉑⑲ たなかさんはどこにいますか。
- ㉓⑲ こぼやしせんせいのけんきゆうしつはどこですか。
- ⑳⑲ あのひとはだれですか。
- ㉕⑲ ほんのしたは？
- ④⑰ じゃあ、ひきだしのなかは？
- ④⑱ つくえのよこのくずかごのなかは？

はこ〔箱〕(1)

④② ラジオのまえのはこのなかにもありませんね。

ひきだし(2)

④⑩ じゃあ、ひきだしのなかは？

④① ひきだしのなかにもありませんね。

ひと〔人〕(1)

③② あのひとはだれですか。

へや〔部屋〕(1)

②② そのとなりのへやです。

へん〔辺〕(1)

④⑧ このへんにはありませんね。

ポケット(1)

⑤④ ポケットのなかですよ。

ポスト(3)

④⑩ あそこにポストがありますね。

⑫⑬⑬ あのポストのむこうにあります。

ほら(1)

⑤⑤ ほら。

ほん〔本〕(3)

③⑦ ほんのしたは？

③⑧ ほんのしたにはありません。

③⑨ ほんのあいだにもありません。

まえ〔前〕(1)

④② ラジオのまえのはこのなかにもありませんね。

まわり〔回り〕(1)

④⑨ ええ、つくえのまわりにはありませんね。

みぎがわ〔右側〕(2)

③③ あ、このさきのみぎがわにあります。

④④ このさきのみぎがわにあります。

むこう〔向こう〕(2)

⑫⑬ あのポストのむこうにあります。

よ(4)

⑳ しばやしせんせいのけんきゅうしつにいますよ。

㉑ つくえのうえにはありませんよ。

㉒ ここですよ。

㉓ このポケットのなかですよ。

よこ〔横〕(1)

④⑤ つくえのよこのくずかごのなかは？

ラジオ(2)

④② ラジオのまえのはこのなかにもありませんね。

④④ ラジオのうしろにもありませんね。

ろうか〔廊下〕(1)

④① このろうかのつきあたりにエレベーターがあります。

わたし〔私〕(1)

④③ ともこさん、わたしのつくえのうえにさいふがありますか。

資料2 シナリオ全文

題 名 日本語教育映画
「さいふはどこにありますか」
— 「こそあと」+「—がある」—

企 画 文化庁 国立国語研究所

制 作 日本シネセル株式会社

フィルム 16 $\frac{mm}{m}$ EKカラー

巻 数 全1巻

上映時間 5分

制作スタッフ

制 作 静 永 純 一

担 当 神 崎 晴 之

脚 本 道 林 一 郎

演 出 道 林 一 郎、前 田 直 明

撮 影 伊 藤 三千雄、河 村 圭 司

照 明 水 村 富 雄、小宮山 達 夫

車 両 小 室 博 信、前 田 直 明

編 集 道 林 一 郎

ネガ編集 亀 井 正

録 音 小 林 賢

タイトル動画アートフィルム

現像所 東洋現像

出 演 東京放送劇団
劇団阿香車

登場人物 通行人（男性）
通行人（女性）
たばこやのおばさん
訪問者（佐藤）
男子学生 E

男子学生 F
 " G
 女子学生 1 栄子
 " 2 友子

カット	画面	セリフ
1 2	タイトル 日本語教育映画 路上 ワイプ、タイトルだぶり タイトル さいふはどこにありますか 上手より通行人(女) 下手より通行人男現われ、女 性たずねる ストップモーション 男性指さして、 ストップモーション 男、女別れる	女性「①あのう、ちかてつのいりぐちはどこ にありますか。」 女性「②ちかてつのいりぐちはどこにあり ますか。」 男性「③あ、このさきのみぎがわにありま す。」 男性「④このさきのみぎがわにあります。」 女性「⑤ああ、どうもありがとうございました。」
3	たばこやの前 佐藤たずねる ストップモーション おばさんたちあがって	佐藤「⑥ちょっとすみません。 ⑦タクシーのりばはどこですか。」 佐藤「⑧タクシーのりばはどこですか。」 おばさん「⑨あ、タクシーのりばは……………」 ⑩あそこにポストがありますね。」 佐藤「⑪ええ。」
4	おばさん出て来て、指さす ストップモーション	おばさん「⑫あのポストのむこうにあります。」 おばさん「⑬あのポストのむこうにあります。」
5	イラスト	
6	佐藤去る	佐藤「⑭ああ、あそこですね。」

7	大学の正門前で 佐藤下手より、栄子上手門の 中から出て来る	⑮どうもありがとうございました。」 佐藤「⑯あのう、じむしつはどこにありますか。」 栄子「⑰あのたてもものなかにあります。」 佐藤「⑲あ、そうですか。 ⑲どうもありがとう。」
8	廊下で 佐藤下手より、E、上手より 登場	佐藤「⑳あの、じむしつはどこですか。」 学生E「㉑このろうかのつきあたりにエレベーターがあります。 ㉒そのとなりのへやです。」 佐藤「㉓そうですか。 ㉔どうも……。」
9	喫煙室でたむろしている学生 F、G、友子、そこへ佐藤	佐藤「㉕すみませんが、たなかさんはどこにいますか。」 学生F「㉖たなかさんはどこにいますか。」 学生G「㉗こばやしせんせいのけんきゅうしつにいますよ。」 佐藤「㉘ああ、そうですか。」
10	たずねる佐藤	佐藤「㉙こばやしせんせいのけんきゅうしつはどこですか。」
11	答える女学生	友子「㉚としょかんのそばのだいがくいんのはたてものです。」
12	佐藤去る	佐藤「㉛どうもありがとうございました。」 友子「㉜あのひとはだれですか。」
13	女子寮の前、中から女学生出 て来て、ハンドバックの中を さぐる	
14	ドアがあいて栄子入って来る	栄子「㉝ともこさん、わたしのつくえのうえにさいふがありますか。」 友子「㉞さいふ？」

		③⑤つくえのうえにはありませんよ。」
15	机にかけよって本を持ち上げながら	栄子「③⑥ありませんね。」 友子「③⑦ほんのしたは？」 栄子「③⑧ほんのしたにはありません。 ③⑨ほんのあいだにもありません。」
16	自分の机の前に座っている友子	友子「④⑩じゃあ、ひきだしのなかは？」
17	ひきだしをあける栄子	栄子「④⑪ひきだしのなかにもありませんね」
18	立ち上って箱の中をさがす友子	友子「④⑫ラジオのまえのはこのなかにもありませんね。」
19	机の下をさがす栄子	栄子「④⑬つくえのしたにもありません。」
20	ラジオの後ろをみる友子 栄子まだ机の下をさがしている	友子「④⑭ラジオのうしろにもありませんね」 友子「④⑮つくえのよこのくずかごのなかは？」 栄子「④⑯くずかごですか。」
21	くずかごの中をさがす栄子	栄子「④⑰このなかにはありません。」
22	みまわす友子	友子「④⑱このへんにはありませんね。」
23	立ち上がって部屋の中を歩き 回る栄子	栄子「④⑲ええ、つくえのまわりにはありませんね。」 栄子「⑤⑰ああつ。」
24	レインコート	
25	栄子、指さす	栄子「⑤⑱あそこです。」
26	たずねる友子	友子「⑤⑲えっ、どこ？」
27	栄子、レインコートへ走り寄る	栄子「⑤⑳ここですよ。 ⑤⑳このポケットのなかですよ。 ⑤㉑ほら。」
28	ほほえむ友子	
29	ほほえむ栄子	
30	出演タイトル 東京放送劇団	

31	劇団 阿香車 企画・制作タイトル 企画 文化庁 国立国語研究所 制作 日本シネセル株式会社	
----	---	--

昭和53年3月

国立国語研究所

〒115 東京都北区西が丘3丁目9番14号